

書評

木村大治著

『見知らぬものと出会う——ファースト・コンタクトの相互行為論』

(東京大学出版会、2018年)

大庭 弘継

本書は、文化人類学者が、地球外知的生命体(ETI)、いわゆる宇宙人とのファースト・コンタクトを題材に、多くのSF小説を参照しながら、コミュニケーションの“本質”を探究した“研究書”である。宇宙人という単語のせいで、読者から「トンデモ本!？」という反応が返ってくるかもしれない。だが、その反応は大きな間違いである。本書は、トンデモ本どころか、画期的な研究書である。

しかし本書は、そのタイトルや「もしも宇宙人と出会ったら」という帯から、誤読されてしまうかもしれない。まず明確にしたいのが、本書は宇宙人とのファースト・コンタクトの方法を探究したものではない、という点である。あくまで、宇宙人とのファースト・コンタクトについての議論は、研究の目的ではなく手段であり、本書は文化人類学(やその他の学問)が探究するコミュニケーションの“本質”を探究したものである、と強調しておきたい。

そのうえで、本書の内容を概説する。本書は、人類学が探究してきた“他者”の究極形態の一つとして宇宙人を仮定する。次に、人間はたとえば「1、2、3、4、5」といった数字の羅列のような「規則性」を念頭に置いて、宇宙人とのコミュニケーションを考えてきた。しかし、その「規則性」は、宇宙人も共有できる規則である、という保証はないのだ。その一方で、「規則性」の重要な点は、人間がゲームのように楽しみながら規則性を生み出してきたことにある。宇宙人の行動原理は不明だが、少なくとも人間は、規則の根拠が究極的には不在でも、ゲームのように楽しみながら規則性を生み出すことができる。筆者はここで、寛容の原理を敷衍して、相手を理解し「規則性」を生み出そうとする人間の志向性を導き出す。

まとめると、筆者は、ファースト・コンタクト

に備えて人間が準備してきた「規則性」を批判し、いま想定している「規則性」が普遍的でないことを示したうえで、それでもなお、ファースト・コンタクトに備える準備として、人間は相手を知りたいと望み「規則性」を生み出そうとする志向性を有する、というメタな行動原理を示しているのである。

なお本書の画期的な点は、SF小説を資料として用いることで、上記のメタな行動原理が、どう機能しているかを分析している点である。通常の文化人類学は、実際に存在する文化を対象とする。それとは逆に、少なくとも目の前には存在しない宇宙人を対象にするためには、ありとあらゆる可能性を開いて検討する必要が生じる。ここに、あらゆる可能性に開かれたSF小説という資料を用いることの利点が存在する。SF小説は、あらゆる可能性に適用しようとする理論を打ちたてようとする際、その妥当性を検証する試金石として有益な資料である。その意味で、本書のように想像の産物を資料として用いる正当性が確かに存在するのである。

これは、本書が学問の新たな取り組み方を示唆していることを意味する。手を出してはいけない、と暗黙の裡に自制してきたテーマや従来は使用できなかった資料を、必要に応じて使ってもよいのだ、と。この点で、本書は画期的である。指導教員から筆者が受けたという「面白かったら何でもええです」(本書128頁)という指導を学問的に昇華して、SF小説を正当な資料として位置付けるという、新たな学問の方法を提示した点で、本書は画期的な研究書である。